

イタリア共和国ウルビーノ歴史的地区における景観論争

A Study on the Urban Landscape Controversy at the Historic Centre of Urbino in Italy

清野 隆*
SEINO, Takashi

Abstract: The purpose of this study is to clarify the background and the points of issue of a controversy on urban renewal project at the Historic Center of Urbino in Italy and to consider indications about creation and conservation of urban landscape. There are the following three points of issue that the controversy indicates, the authenticity of the restoration of the historic building, the integrity of urban landscape and the decision-making process of landscape planning.

Key words: 都市景観 (urban landscape), 世界遺産 (world heritage), オーセンティシテイ (authenticity), インテグリティ (integrity), 政策決定 (decision-making), イタリア (Italy)

- I はじめに
- II Dataの歴史—建設, 廃墟化, 再生—
 - 1) Dataの建設
 - 2) Dataの廃墟化
 - 3) Dataの再生
- III Data景観論争の経緯
 - 1) Data再生プロジェクトの実施決定
 - 2) 再生プロジェクトへの批判と世界遺産取消しの危機
 - 3) 設計案の修正と施工の是認
- IV Data景観論争の争点
 - 1) 論争の主体と構図
 - 2) Data再生プロジェクトにおける修復方法
 - 3) Data再生プロジェクトがもたらす景観の変化
- V Data景観論争が都市景観のガバナンスに示唆すること

I はじめに

本稿は、1999年から2001年にかけてイタリア共和国のウルビーノ歴史的地区において生じた、Dataという歴史的建造物の再生プロジェクトを巡る景観論争（以下、Data景観論争と記す）について報告し、論争の経緯、論争の争点を明らかにすることで、都市景観の保全のあり方について考察することを目的とする。

Data景観論争の舞台であるウルビーノはイタリア中部のマルケ州に位置する。アドリア海に面する都市、ペーサロから内陸側に約35kmの距離にある丘陵都市である。ルネサンス期の著名な芸術パトロンであるフェデリコ・モンテフェルトロ侯に統治され、芸術都市として栄えた。画家ラファエロが生まれた都市としても有名である。この時期に後世に多大な影響を与えることになる建築家フランチェスコ・デイ・ジョルジョ・マルティーニ（以下、フランチェスコ・デイ・ジョル

*立教大学観光学部・プログラムコーディネーター

ジョ)によってドゥカーレ宮殿や城砦など、華やかな巨大建造物が建設され、中世から受け継がれた都市構造に大規模な改造が施された¹⁾。ルネサンス期の華やかな歴史と建築遺産の価値が認められ、ウルビーノ歴史的地区は1998年に世界文化遺産に登録されている。Data景観論争は、世界文化遺産の登録抹消が検討されるなど、都市景観の保全について多くの問題を提起していると考えられる。これまで世界文化遺産の登録抹消事例は2009年に抹消されたドレスデン・エルベ渓谷²⁾のみであることから、Data景観論争について紹介し、その内容から都市景観の保全について考察することの意義は大きいと考えられる。

以下、本論では、Data再生プロジェクト、およびData景観論争に関する新聞や雑誌記事などの文献調査とウルビーノ市当局へのヒアリング調査の結果に基づき、Dataの歴史、Data景観論争の経緯、同論争の争点を報告する。

II Dataの歴史—建設、廃墟化、再生—

1) Dataの建設

Dataはモンテフェルトロ侯がウルビーノを統治していた1490年にフランチェスコ・デイ・ジョルジョの設計により建設された厩舎である。

Dataは、北端がヴァルボナ城砦とらせん状の斜路に接続し、南端はサンタ・カテリーナ城砦に接続された、奥行9メートル、幅約120メートル(図1)の細長い空間であり、ウルビーノの玄関口であるメルカターレ広場の正面に位置する。建設当初のDataはらせん状の斜路を通じてドゥカーレ宮殿と接続していた。メルカターレ広場から歴史的地区を見上げると、ウルビーノの一番の見所であるドゥカーレ宮殿と一体的な景観を形成している(写真1)。Dataとドゥカーレ宮殿との位置関係は、次章で詳しく述べる景観論争に深く関連する。

2) Dataの廃墟化

Dataはルネサンス期以降、長年利用されず、管理されない状態が続いたため、屋根が崩落し、廃墟になった。内部空間には土壌が溜まり、外壁に囲まれた空間には植物が鬱蒼と茂った状態のまま、数百年の間放置されていた。その外見から、Dataは豊かな菜園と呼ばれるようになった。他方、ウルビーノは19世紀に入り、ルネサンス期以来の大規模な都市改造が施された。ドゥカーレ宮殿と城壁、ヴァルボナ城砦の間に新しい道路ガリバルディ通りが敷設され、ドゥカーレ宮殿の足元にあったヴァルボナ城砦の上にサンツィオ劇場

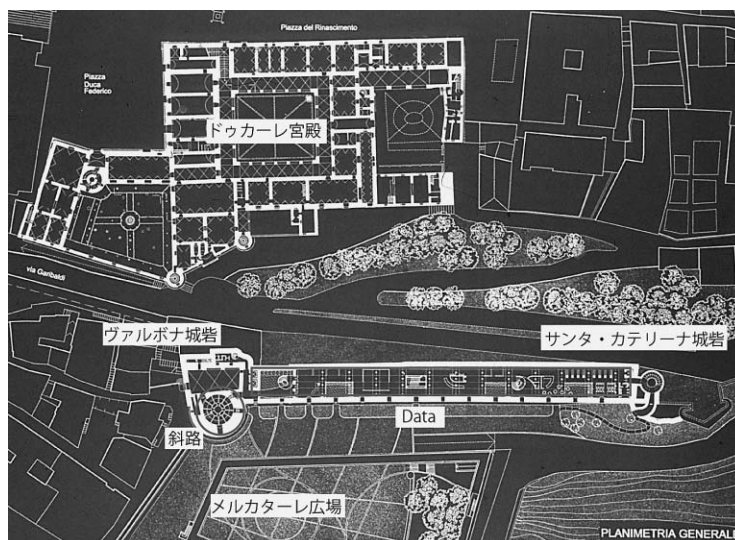


図1 Data再生プロジェクト平面図(ウルビーノ都市計画局蔵、筆者加筆)。



写真1 メルカターレ広場から見たData (2011年9月筆者撮影)。



写真2 かつてドゥカーレ宮殿とDataを接続していたらせん状の斜路 (2011年9月筆者撮影)。

が建設された。この都市改造の過程で、Dataはドゥカーレ宮殿との関係が絶たれた。ヴァルボナ宮殿の上にサンツィオ劇場が建設されたことにより、斜路が封鎖されたためである。ルネサンス期から戦後にかけてドゥカーレ宮殿とメルカターレ広場の間の空間は大きく変貌を遂げ、現在はウルビーノ歴史的地区にとって重要な場所となっただけで、らせん状の斜路やDataは、第二次大戦直後まで、史料でその存在を確認されるのみであった。1958年から1964年にかけて、ウルビーノ都市再生のための調査が進められ、実際に斜路やDataが発見された。その後、1985年に本格的な発掘調査が実施され、上述したDataの歴史が明らかにされた³⁾。

3) Dataの再生

次にData再生プロジェクトについて紹介する。第二次大戦後、ウルビーノ歴史的地区は衰退、荒廃していたため、1950年代から都市再生プロジェクトを展開してきた⁴⁾。Data再生プロジェクトは一連の都市再生プロジェクトの一部であり、1950年代から約50年に渡り、ウルビーノの都市再生に携わってきたジャンカルロ・デカルロによって設計、計画された。まず、ウルビーノ都市基本計画が策定された1960年代にDataを再生させる計画が構想された。1969年から70年にかけて構想された再生プロジェクトでは、隣接する建造物、広場、公園などと共に一体的に整備されることが想定されていた (De Carlo, 1978 : 27)。し

かし、メルカターレ広場の開発、サンツィオ劇場の改造、斜路の修復などが完了したが、Data再生プロジェクトは事業費を確保できず実施されなかった。

1998年にData再生プロジェクトは事業資金を獲得し、その実現が決定した。本稿が取り上げる景観論争は、1998年時に提案されたData再生プロジェクトを巡る論争である。1998年時のプロジェクトでは、Dataは図書館、展示スペース、マルチメディアを駆使した研究所、ウルビーノの都市形成に関する資料や史料を収蔵した複合施設として利用されることが提案されていた。設計者であるデカルロは、パトリック・ゲデスがイギリス、エジンバラに設置した都市観測所⁵⁾から着想を得て、Dataを老若男女が集い、この都市が抱える様々な問題を解決するために利用される空間として構想していた (Marchegiani S., 1999 : 24, Fuligna T., 2000 : 40)。

次にData再生プロジェクトの設計上の特徴をまとめる。まず、新しい構造体は、Dataの中、すなわち四方の外壁の内側にすっかり収められている。これは、歴史的遺産であるDataの現存する部分に手を加えずに内部空間を創造するための方法として採用されたものである。そして、材料に鉄とガラスを用い、理論上は解体可能な構造体であった。また、構造体の上に架けられた屋根は波型に湾曲したものであった (図2, 写真3)。現代的な材料と技術を多用していることがこの設計案の特徴といえる。しかし、同時にウルビーノの

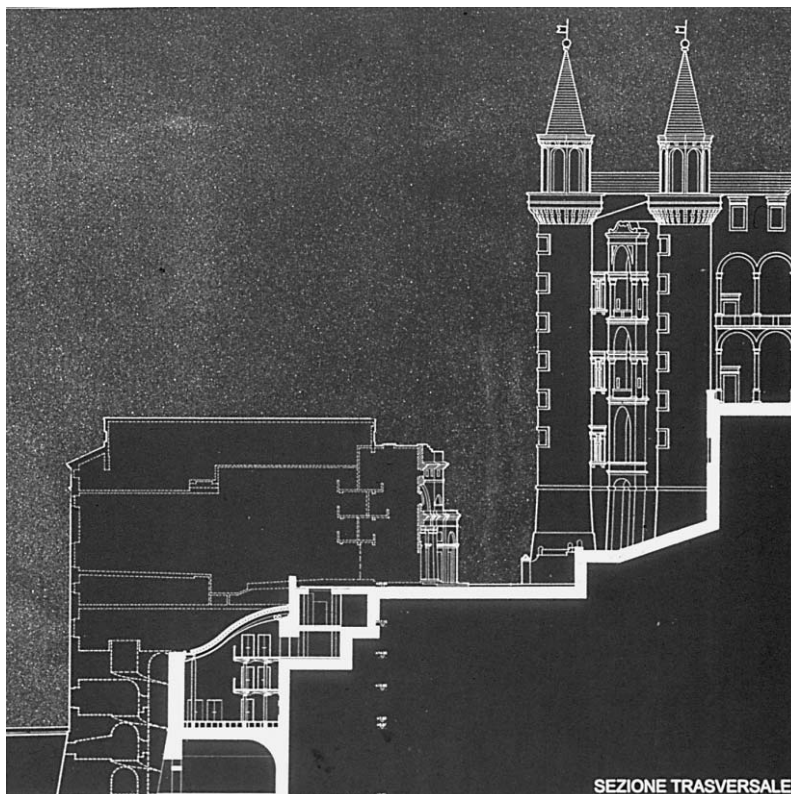


図2 1998年に実施が決定したData再生プロジェクトの断面図。



写真3 1998年に実施が決定したData再生プロジェクトの模型。

屋根に伝統的に利用されているテラコッタを利用するなど、歴史や伝統を尊重する性格も示している。内部空間は3層のフロアが設置され、内部空間の一部は、かつて菜園であった歴史を視覚的に公開するために、パティオが設けられていた。設計者デカルロは、Dataの歴史を尊重して、再生プランを設計していたといえる。

Ⅲ Data 景観論争の経緯

1) Data 再生プロジェクトの実施決定

Data 再生プロジェクトは、1997年に国のロト基金⁶⁾から事業資金を獲得し、1998年から2000年までの3年間で施工されることが決定していた。この決定を受けて、ウルビーノ当局は正式に上述のデカルロに設計を依頼した。ロト基金からの資金の獲得は、ロト基金の委員会、文化財監督庁、政府がData 再生プロジェクトに同意してい

たことを意味し、プロジェクト実施は公的に認可されていたことがわかる。当時のウルビーノ市長であるマッシモ・ガルッチも、Data再生プロジェクトはロト基金の審査過程において政府のあらゆる組織の判断を得ていたこと、プロジェクトを進める過程では文化財監督官による指導を受けていたこと、文化財監督官はData再生プロジェクトを模範的な事例として評価していたことを語っている (Marchegiani S., 1999 : 27)。ウルビーノ市議会は当初から再生プロジェクトの実施を承認した上で、可能な限り幅広い議論の場を設けるべきとの立場から、市民が意見を申し出ることができるようにプロジェクトを進めることを提案した。市民参加のプロセスを経た結果、市民からプロジェクトに反対する意見は表明されず、市議会はData再生プロジェクトの実施を可決した。

2) 再生プロジェクトへの批判と世界遺産取消しの危機

しかし、Data再生プロジェクトは施工の途上で暗礁に乗り上げる。プロジェクトの意思決定プロセスは十分に透明性が確保されていたにも関わらず、施工段階になってData再生プロジェクトを批判する声が上がられた。当時の内閣の政務次官であり、美術史家であるヴィットリオ・スガルビがデカルロ設計の再生計画をウルビーノにふさわしくないデザインであると批判した。2000年

にイタリアの代表的な美術雑誌「Quadri e Sculture」誌上にData再生プロジェクトを批判する特集が生まれ、イギリス美術界の重鎮たちがData再生プロジェクトについてウルビーノにふさわしくないと批判した。論争を起こしたスガルビは、イタリアの環境保護団体イタリア・ノストラを通して、ユネスコにData再生プロジェクトが実現する場合、ウルビーノ歴史地区を世界文化遺産リストから抹消すべきと進言した。この状況を受けて、ユネスコの外郭組織であるイコモスが専門家委員会を立ち上げ、施工段階にあったプロジェクトを調査することを決定した (図3)。そして、プロジェクトの方針について裁定が下されるまでの1999年から2001年にかけて、ウルビーノ市内の様々な立場からData再生プロジェクトに関する評価が表明された。

3) 設計案の修正と施工の容認

Data景観論争は2002年に結末を迎えた。法的にプロジェクトを監督する立場にある文化財監督庁が最終的な結論を下した。文化財監督庁の決定は、双方の立場を尊重する形をとるものであった。すなわち、ウルビーノの記憶に残る場所をおびやかすことのないよう、双方の合意できる結論を探ることを命じ、設計案の屋根を隠す、または設計案を変更することを要請した。写真4は、2011年9月に完成後のDataの屋根を撮影したもので

URBINO - L'Unesco ha aperto un'istruttoria sulla città di Urbino per verificare la qualità del recupero della Data. Un sopralluogo verrà svolto a Urbino da un esperto Icomos, dopo una segnalazione di Italia Nostra, contro il progetto di De Carlo.

«Non potranno dire che nessuno li aveva avvertiti» scrive Gabriele Fattori, consigliere del Polo per Urbino divulgando la notizia - Noi l'abbiamo detto, glielo abbiamo ripetuto. A niente è servito che la nostra fosse unita alle voci di tanti altri e a tutte quelle dei più grandi. E' stato ignorato il fatto che il dissenso del Polo esprimesse in modo significativamente trasversale il dissenso di gran parte dei cittadini. L'osservatorio s'ha da fare, punto e basta. Gombich sbagliava, Vittorio Sgarbi sbaglia, ecc. Non si torna indietro di un passo. Con buona pace della tanto invocata collaborazione politica. Ma siccome questa volta non è come le altre volte, siccome questa volta

Istruttoria aperta per la Data, le accuse di Fattori (Polo)

«Urbino rischia la radiazione dal patrimonio dell'umanità»

dossier di dodici pagine che costituiscono fino a oggi il più violento e autorevole attacco al progetto De Carlo. Lasciamo tutti i commenti ai cittadini, alle autorità e alla stampa. Tranne uno che esprimiamo come Polo per Urbino. A questo punto il problema non è De Carlo. Lui il progetto doveva e poteva farlo come voleva. Il problema non è neanche quello di capire come finirà questa storia perché c'è ancora tempo. Se ci sarà la volontà politica di farlo. Per trovare una soluzione. Il vero problema sta in ciò che è già accaduto: nell'intervento Unesco, nell'istruttoria aperta dall'Icomos, nel possibile procedimento di espulsione, nelle autorità politiche che potrebbero avviarlo e nelle autorità culturali pronte a sostenerlo. In una parola il vero problema, secondo me, sta nello "spuntamento" politico e culturale di questa città. Dopo "vedi Napoli e poi muori" si dovrà dire "vedi Urbino che poi muore"?».



Programmata la visita di un esperto Icomos dopo la segnalazione di "Italia Nostra"

sono in gioco le sorti e il prestigio di un palazzo e di una città del mondo, qualcuno più in alto di noi e di loro non gliel'ha perdonata. L'Unesco, l'organizzazione internazionale che controlla gli Stati tutelino come intangibili i monumenti eletti patrimonio mondiale dell'umanità, è scesa in campo. E lo ha fatto attraverso il proprio organo ese-

cutivo, l'Icomos, ufficializzando l'istruttoria aperta sul caso-Data e minacciando di radicare Urbino da quel patrimonio dell'umanità al quale appartiene.

«La sensazionale notizia è stata divulgata da "Quadri e sculture", una delle più importanti riviste d'arte del mondo che, nel numero di ottobre, dedica all'argomento la rubrica e un

図3 ウルビーノ歴史的地区が世界文化遺産リストからの抹消危機にあることを報じる新聞記事 (Corriere Adriatico, 2000年12月15日刊)。



写真4 設計変更されたDataの屋根（2011年9月筆者撮影）。



写真5 Dataの内部（2011年9月筆者撮影）。



写真6 Data内部の鉄骨構造の地下部分（2011年9月筆者撮影）。



写真7 Data遺構を展示した箇所（2011年9月筆者撮影）。

ある。当初の設計案で提起された波型の屋根は、直線型の傾斜屋根に変更されたことがわかる。完成したDataの内部空間をみると、外壁とは独立した鉄骨造の構造体によって2層のフロアが挿入されている（写真5、6）。また、当初設計案で提案されていたDataのアーチの遺構を確認できる箇所が施工されている（写真7）。景観論争を経て施工されたDataを観察すると、波型の屋根を除いた全ての部分について当初の設計案が実施されたことが確認できる。したがって、Data景観論争は、景観に大きな変化を与える屋根の形態に変更を加える結果を導いたと考えられる。

IV Data 景観論争の争点

1) 論争の主体と構図

まず、Data景観論争に加わった主体⁷⁾を整理

し、論争の構図を示したい。新聞や雑誌などの媒体上でData再生プロジェクトについて意見を表明していた主体は、Dataの所有者であり、プロジェクトの実施主体であるウルビーノ市、設計を担当した建築家デカルロ、ウルビーノ技術家集団⁸⁾、イタリアを代表する美術史家スガルビ、アンドレア・エミリアーニ、イギリスの著名な美術史家エンルスト・ゴンブリッチなどである。この論争は、再生プロジェクトが進められていたウルビーノ内にとどまらず、イタリア全土、さらに国を超えてイギリスにまで展開した。論争が国を超えて展開した理由の1つは、論争の舞台がルネサンスの華開いた都市であり、世界文化遺産に登録されているウルビーノであったからと考えられる。論争における対立の構図は単純である。Data設計案の是非を巡って、プロジェクトを進めるウルビーノ市と設計者デカルロが賛成の立場から、

イタリアとイギリスの美術史家たちがプロジェクトに反対する立場にあった。論争の争点は、Data再生プロジェクトにおけるDataの修復方法と修復によってもたらされる景観の変化である。

2) Data再生プロジェクトにおける修復方法

まず、1つ目の争点として、Dataの修復方法について検討する。つまり、Dataに対して物理的にどのような建築行為を行うべきであるか、どのような建築行為が、あるいはどの程度の建築行為が許容されるか、という問題である。なお、歴史的建造物の修復方法については、1965年にユネスコがまとめたヴェネチア憲章が存在し、歴史的建造物の保存と修復に関する国際的な共通理解が示されている。

デカルロの設計案はDataの現在の形態をそのまま残しながら、四方の外壁に囲まれた空間に鉄とガラスを用いた外壁から独立した構造体を差し込む方法を示している。ヴェネチア憲章に沿って設計案を評価すると、現存する遺構の形態をそのまま維持し、遺構に付加される構造体に現代的な材料と技術が使用されている点で、Dataのオーセンティシティを損なうものではないといえる。Data再生プロジェクトを推進する立場のウルビーノ市長マッシモ・ガルッチは、歴史的建造物の修復について、歴史的建造物の原型の要素をすべて修復しながら、歴史的建造物に新たな機能を与えるべきであり、そういった方法が歴史的建造物の再生の唯一の方法であると論じている(Marchegiani S., 1999 : 27)。

一方、Data再生プロジェクトのデカルロによる設計案について、イギリス人美術批評家のエンルスト・ゴンブリッチは「文献学的な修復ではない」と評し、Data再生プロジェクトの中止を求めている(Quadri e sculture 紙, 2000)。「文献学的な修復」とはどのような修復方法であるのか。当時のガルッチ市長の発言によれば、デカルロの設計案を批判した際に用いられた「文献学的な修復」という指摘は、外壁を修復すること、軽量の屋根を載せること、内部空間を転用しないことを意味するようである(Marchegiani S., 1999 : 27)。ゴンブリッチの主張は、Dataは旧来の形態に復

元されるべきであり、旧来と異なる用途を認めるべきでない、という立場といえる。美術史家であり、ポーニャ文化財監督官のアンドレア・エミリアーニもゴンブリッチと同様の立場を示している。エミリアーニは、Dataのような歴史的建造物に鉄やガラスを用いて内部空間を生み出すことに否定的な意見を述べ、さらに都市観測所としてDataを利用する案に対して、博物館や美術館に転用すべきでないと主張している(Resto del Carlino 紙, 2000年12月17日)。

2つの主張を比較してみると、修復方法において大きな違いが存在することがわかる。それは修復後に現れる空間をイメージすると理解しやすい。すなわち、歴史的建造物の修復は建設当初の建築的価値とその当時の形態に復元されるべきという主張と、社会や都市機能の変化に応じて新しい形態を創造するべきという主張が存在し、両者が実現する空間の違いが対立を生み出したと考えられる。ここで注目すべき点は、両者の修復方法に対する立場の相違である。前者は建設当初から現在に至る経緯と無関係な修復方法であり、後者は建設当初から現在に至る経緯を尊重した修復方法である。この2つの立場がData再生プロジェクトに対する評価の相違をもたらしていると考えられる。

3) Data再生プロジェクトがもたらす景観の変化

次に、Data再生プロジェクトによって生じる景観の変化について検討する。Data再生プロジェクトによる設計案が示している波型の屋根の形態は、ウルビーノ歴史的地区の玄関の正面に位置し、ドゥカーレ宮殿の足元に位置するDataの屋根としてふさわしいかどうかという問題である。Data再生プロジェクトの成り行きは、この争点が最も決定的であったと考えられる。なぜならば、屋根の形態を巡る議論は、ウルビーノ歴史的地区の世界文化遺産として適性を議論するに至ったからである。

まず、設計者デカルロは、Data再生プロジェクトを回顧する中で、現代的な建築材料や建築技術を駆使したDataの修復を設計した根拠について、Dataは既にドゥカーレ宮殿の一部ではなく、

Data 再生プロジェクトより前にウルビーノの景観は常に変化してきたと説明している (Il giornale dell'architettura 紙, 2004). デカルロは, Data とウルビーノの景観は時間が経過する中で, 様々なプロジェクトによって物理的に変化してきたことを論拠に, Data 再生プロジェクトによって景観が変化することを許容している. その一方で, デカルロ自身は自分が愛するウルビーノの町で奇抜なものを作ろうとしたことはないと述べており, ウルビーノの歴史的景観を軽視していないと主張している. また, ウルビーノ市や市民もまた, デカルロの設計案とデカルロの設計思想を理解し, 支持している. Data 再生プロジェクトを推進する立場のウルビーノ市長のガルッチは批判の対象になった屋根について, 現代という時代性を表現する形態であることの意義を重視し, ウルビーノ前市長のジョルジョ・ロンデイもまた, あらゆる他の世紀に刻まれた痕跡と共に 21 世紀の痕跡を残すことが, イタリアとヨーロッパの文化が生き生きとさせると述べている (Marchegiani S., 1999 : 27, Corriere Adriatico 紙, 2000 年 12 月 20 日付). このほか, ウルビーノ技術家集団は, 1964 年の都市基本計画の作成時から斜路, 旧厩舎, 劇場を共存させ, 一体的な建築物群として再生できると表明してきたデカルロへの信頼と期待を込めながら, Data 再生プロジェクトが修復憲章⁹⁾の規則に沿いながらも現代性を表現し, Data を再生させる傑作的な建築であると評価し, デカルロの Data 再生プロジェクトが 2 人の偉大な建築家, ヴィンチェンツォ・ギネッリとフランチェスコ・デイ・ジョルジョ・マルティーニを決定的に調和させるとの意見を述べている (Corriere Adoriativo 紙, 2000 年 12 月 21 日付; il Resto del Carlino 紙, 2000 年 12 月 21 日付). 以上が, 設計者デカルロをはじめ, プロジェクトに賛成する立場からみた景観の変化の捉え方であり, Data 再生プロジェクトが加わった都市景観は, 多様な建築行為, 都市改造によって形成されたウルビーノ歴史, 都市の積層性を表現するものとして評価している.

一方, イギリス人美術評論家であるケイス・クリスチャンセンは, 厩舎の修復に採用された設計

案がドゥカーレ宮殿の足元に開かれたエリアの建造物と一貫性あるものになることが望ましいと論じ, 設計案を変更すべきことを指摘している (Quadri e sculture 紙, 2000). また, イタリア美術専門家であるデニス・マホンは, Data の修復は設計者であるフランチェスコ・デイ・ジョルジョに対する敬意を強く払うべきと主張している (Quadri e sculture 紙, 2000). 2 人の主張は, Data の修復はドゥカーレ宮殿との景観上の整合性を優先させることが重要であると説明しており, デカルロによる設計案の Data はドゥカーレ宮殿と共存できないと評価している.

このように, Data 再生プロジェクトは現代の建築技術を積極的に使用して 2 つの建築遺産と調和した空間イメージを表現しようと試みたが, これに対してウルビーノの景観的価値が損なわれるとの批判が生じた. Data 景観論争では, フランチェスコ・デイ・ジョルジョによるドゥカーレ宮殿とギネッリによるサンツィオ劇場という 2 つの歴史的な建造物と調和する景観が争点となり, 現代性を表現しながら景観を創出するべきか, 過去の姿を参照した景観を創造するか, といった 2 つの立場が議論されていた.

V Data 景観論争が都市景観のガバナンスに示唆すること

Data 景観論争はイタリアにおける事例であり, 法制度, 建築技術, 建築思想など様々な前提条件の異なる日本の都市景観に関する問題と比較することは容易ではないが, 日本の都市景観の保全のあり方に示唆することは少なくない. 最後に, Data 景観論争の事例分析を踏まえて, 都市景観の保全のあり方について考察を加える.

まず, Data 再生プロジェクトはウルビーノ市当局によって市民, 文化財監督庁, 政府機関の判断と支持を得ながら進めてきたにも関わらず, 変更を迫られた. これは既定の法制度が機能しておらず, 都市景観の保全に関するガバナンスが危機的な状況に置かれていることを意味する. また, 論争の末に導き出された結論は, 議論を尽くしたとは言い難く, 凡庸な折衷案であったと考えられ,

景観保全の意思決定にも問題があったといえる。世界文化遺産の登録抹消の可能性が浮上したために、市民の意思決定が阻害され、プロジェクトの成否は第三者に委ねられてしまった。しかし、Data 景観論争では、歴史的建造物の修復はどのような空間を創出するべきかという歴史的建造物の保全のあり方と、修復の結果としてどのような景観が創出されるべきかという都市景観の保全のあり方、という重要な問題が争点になっていた。この2つの問題には一般解が存在せず、問題が生じた場所に応じた特殊解が存在するに過ぎない。そして、特殊解とは科学的な根拠と法制度を参照しつつ、市民の意思決定により導き出されるべきである。したがって、世界文化遺産の登録抹消の是非を含めて、Data とウルビーノ歴史的地区の都市景観をどのように保全するのが市民によって議論され、意思決定されるべきであったと考えられる。

注

- 1) ウルビーノの歴史については、Benevolo Leonardo and Boninsegna Paolo (1986) が詳しい。
- 2) ドレスデン・エルベ渓谷は2004年に世界文化遺産に登録された。登録抹消の理由は、市内を流れるエルベ川への架橋によって文化的景観が損なわれたためである。架橋の是非は住民投票によって決定され、生活の利便性を追求する立場が景観の保護を重視する立場を上回った。ユネスコのホームページが詳しい。参考URL : <http://whc.unesco.org/en/news/522>。
- 3) 調査の結果は、Bruscia Marta (1990) にまとめられている。
- 4) 1950年代から着手されたウルビーノの都市再生については、De Carlo (1966 ; 1978), Buncugna Franco (2000) が詳しい。
- 5) 都市観測所については、パトリック・ゲデスが著作『進化する都市』の第14章、都市の研究で詳しく述べている(ゲデス, 1982 : 274-284)。
- 6) 宝くじの収益による基金であり、基金内の委員会と政府の審査により自治体の公共事業費などに助成される。
- 7) 本論では新聞や雑誌などの媒体のみを分析対象としているため、論争を詳細に把握しているとはいいがたいが、論争の争点を把握することは可能であると筆者は考えている。
- 8) ウルビーノで活動する建築家、地学者、幾何学者、専門家、エンジニアなどの技術者の組織である。
- 9) イタリアにおいても近代化や戦争の混乱の中で多くの文化財が喪失されたことから、文化財の保護し、修復するための技術と思想を示した文書として、修復専門家によって修復憲章が起草された。直近では、1972年に起草された。

文 献

- Benevolo Leonardo and Boninsegna Paolo (1986): *Urbino*, Editori Laterza.
- Bruscia Marta (1990): *La Data (Orto dell'abbondanza) di Francesco di Giorgio Martini*, Quattro Venti.
- Buncugna Franco (2000): *Conversazione con Giancarlo De Carlo. Architettura e liberta'*, Editorice A coop. (279-309)
- De Carlo Giancarlo (1978): "Conversazione su Urbino con Pierluigi Nicolin", *Lotus International*, vol. 18, 4-41.
- De Carlo Giancarlo (1966): *Urbino. La storia di una città e il piano della sua evoluzione urbanistica, Gli spiriti dell'architettura*, Editori Riuniti.
- Fulgina Tiziana (2001): *Una giornata a Urbino con Giancarlo De Carlo. visitando le sue architetture.*, Arti Grafiche Editoriali srl.
- ゲデス, パトリック, 西村一朗訳 (1982): 『進化する都市』鹿島出版会。
- Marchegiani Stefano (1999): *Il progetto di restauro e recupero funzionale del complesso della "Data" o "Orto della abbondanza" a Urbino*, *Arredo & Città*, no. 1, 20-27.
- "I barbari ad Urbino", *Quadri e sculture*, n. 36, 2000.
- "Istruttoria aperta per la Data, le accuse di Fattori (Polo). Urbino rischia la radazione dal patrimonio dell'umanità", *Corriere Adriatico*, 2000, dicembre 15.
- "Il sindaco s'arrabbia e tuona contro I "pardini" del Polo", *Corriere Adriatico*, 2000, dicembre 16.
- "Urbino, il Polo contro il rischio di espulsione", *Corriere Adriatico*, 2000, dicembre 18.
- "Londei sul progetto di restauro delle stalle ducali", *Corriere Adriatico*, 2000, dicembre 20.
- "I tecnici: urbanati Recupero della Data Un'orepa esemplare ed unica", 2000, dicembre 21.
- "Istruttoria sul progetto", *Resto del Carlino*, 2000, dicembre 14.
- "Polo: Ora slla Data il Comune fara I conti con l'Unesco", *Resto del Carlino*, 2000, dicembre 15.
- "Il sindaco Galuzzi perlica con Toni poremica a chi e' contrario al progetto", *Resto del Carlino*, 2000, dicembre 16.
- "Intervista allo storico dell'arte Andrea Emiliani: che non lascia, raddopia", *Resto del Carlino*, 2000, dicembre 17.
- "I Tecnici: E' la summa tra Ghinalle e Francesco di Giorgio Martini", *Resto del Carlino*, 2000, dicembre 21.
- "Lettera: Urbino ha perso la cultura e l'Unesco non ci salvere", *Resto del Carlino*, 2000, dicembre 23.
- "Intervista su Urbino e dintorni", *Il giornale dell'architettura*, No. 17, 2004.

付 記

本稿は公益財団法人大林財団の平成22年度研究助成（研究題目：戦後イタリアにおける都市基本計画にみる都市論と都市計画思想に関する研究）を受けて実施した調査の成

果である。調査遂行にあたり、ウルビーノ市都市計画局、ウルビーノ大学、ペーサロ・ウルビーノ県フェデリチャーナ図書館の協力を得た。ここに記して謝意を示したい。

